

1

自動詞と他動詞の交替

1.1 背景：先行研究

(1) 先行研究1：初期の分解意味論

a. 着眼点：自他対応のある動詞を用いた文の間には必然的な関係がある

- (i) John **broke** the vase.
- (ii) The vase **broke**.

b. 研究姿勢：単語の意味を分解することで、二つの文の関係を説明する

- (i) The vase broke.



- (ii) John broke the vase.



c. 特徴： (i) 他動詞と自動詞を同一の因果連鎖の中で捉える
 (ii) 自動詞をそれ以上細かく分類することはなかった

(2) 先行研究2：1990年代以降の分解意味論

a. 着眼点：一部の自動詞（能格動詞）は、動作主が陰に隠れて存在する

b. 例：The vase broke.

形式：変化の原因（≠変化の経験者）は言語化されない

意味：変化の原因（=動作主）が外部の何か

c. 限界：break も一枚岩じゃない

- (i) John **broke** the regulation.
- (ii)* The regulation **broke**.

1.2 主張

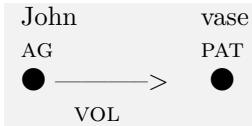
(3) 影山 (2001)

a. 自動詞分類：自動詞を複数のカテゴリーに分類するという点は継承

自他交替を持たない自動詞

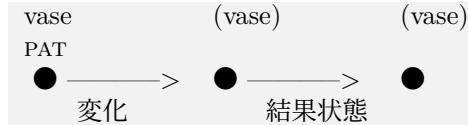
(i) 非能格動詞

work, talk, laugh, cry, ...



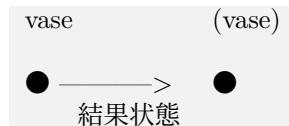
(ii) 非対格動詞（状態変化）

happen, fade, appear, fall, ...



(iii) 非対格動詞（状態）

be, remain, ...



自他交替を持つ自動詞

(iv) 能格動詞（反使役化動詞）：AG は PAT と同一

break, open, ...



ポイント：「勝手に／何もしてないのに」と共起できる

(v) 脱使役化動詞：AG は不特定

「決まる」「かかる」「植わる」「儲かる」



ポイント：「勝手に／何もしてないのに」と共起不可能

Table 1.1: 古語における自他同形動詞とその分化（ローマ字付）

古語形	現代語対応	古語	現代
開く	開く（自）	[ak]-u	[ak]-u
	開ける（他）		[ak-e]-ru
散る	散る（自）	[chir]-u	[chir]-u
	散らす（他）		[chir-as]-u
割く	裂ける（自）	[sak]-u	[sak-e]-ru
	割く（他）	[sak]-u	[sak]-u
曲がる	曲がる（自）	[magar]-u	[mag-ar]-u
	曲げる（他）		[mag-e]-ru
解く	解ける（自）	[tok]-u	[tok-e]-ru
	解く（他）	[tok]-u	[tok]-u
消ゆ	消える（自）	[kiy]-u	[ki-e]-ru
	消す（他）		[k-es]-u
焼く	焼ける（自）	[yak]-u	[yak-e]-ru
	焼く（他）	[yak]-u	[yak]-u

先行研究をまとめる

解答例

2. 先行研究

使役交替に関する理論研究は、複数の段階を経ながら発展してきた歴史がある。以下、大きくこのこの段階を二つに分け、それぞれの中心的な考え方と課題となつたデータについて整理する。

2.1 先行研究 1：他動詞＝非対格自動詞＋動作主

自他交替に関する初期の研究では、自他交替がある動詞について、他動詞の表す意味を、「自動詞の表す意味＋動作主の存在」として捉え理論化することが支配的であった。

第一に、研究段階で中心的役割を果たしたデータをまとめる。自他交替に関する初期の研究で研究者の注目を集めたのは、(1)に示すような他動詞文と非対格自動詞文の推論関係である。すなわち、(1)a が正しければ、(1)b も必ず正しくなる、という論理的必然性を捉える必要性が認識された。

(1) データ 1

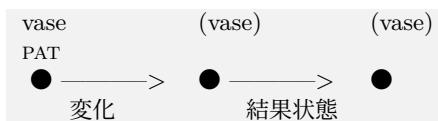
- a. John broke the vase.
- b. The vase broke.

第二に、この研究段階で中心的役割を果たした理論的潮流をまとめる。理論化に際しては、述語を分解し、単語の意味を複数の意味要素の集まりとして分析する分解意味論的見方が支配的となる。細かく分ければ、どのような定式化を目指すのか、また、自動詞を基本とするのか、他動詞を基本とするのかなどに、様々な流儀や道具立てが存在するが、ここでは、特定の理論に与するのではなく、これらのアプローチが共有した図式として、

(2) 仮説 1（他動詞＝非対格自動詞＋動作主）

- a. 自動詞： $<y \text{ が変化}> \Rightarrow <y \text{ の新しい状態}>$
- b. 他動詞： $<x \text{ が変化}> \Rightarrow <y \text{ が変化}> \Rightarrow <y \text{ の新しい状態}>$

(i) The vase broke.



(ii) John broke the vase.



第三に、この理論的分析が抱えていた課題／限界をまとめる。この初期の分析では、自動詞はひとまとめに扱われていたが、自動詞は動作主を含意するか

否かで、二種類のものを同定する必要性があることが、いくつかのテストから指摘されるようになった。一つ目は、意図性を持つ副詞修飾のテストである。(3)a に見るように、all by itself がつけられるものと、そうでないもののが存在する。となる。二つ目は、疑似分裂文テストである。(3)b がこの点を示している。三つ目は、命令文テストである。(3)c がこの点を示している。

34 (3) データ 2

38 2.2 先行研究 2：自動詞の分類

39 上記のデータ 2 が示しているのは、他動詞と交替する自動詞に動作主の存在をそ
40 の意味に含む自動詞であること、である。この理解に基づく研究実践を、ここで
41 は、研究の第二段階として位置づけたい。

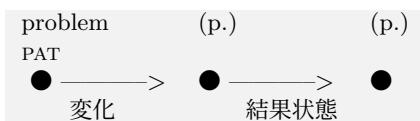
42 第一に、この研究段階で俎上にあがっているデータは、先に課題として指摘
43 されていた「データ2」である。

44 第二に、この研究段階で中心的役割を果たした理論的潮流をまとめる。この
45 明示的には言語化されないものの、意味的に存在していると結論付けられるべき
46 動作主は、他動詞文に想定されている図式の一部が、ある操作によって明示性を
47 失ったものだ、という分析が 1990 年代前半から提案されるようになってきた。この
48 明示性を失わせる操作については、背景化 (?:335)、不特定化 (?)、不定化 (?)
49 など研究者によって、分析にバリエーションが見受けられる。

50 (4) 仮説 2 (能格自動詞→動作主性あり)

- 51 a. 非対格自動詞 : $<\text{y} \text{ が変化}>\Rightarrow <\text{y} \text{ の新しい状態}>$
52 b. 能格自動詞 : $<\text{x} \text{ が変化}>\Rightarrow <\text{y} \text{ が変化}>\Rightarrow <\text{y} \text{ の新しい状態}>$
53
54 c. 他動詞 : $<\text{x} \text{ が変化}>\Rightarrow <\text{y} \text{ が変化}>\Rightarrow <\text{y} \text{ の新しい状態}>$
→ 不定化、不特定化、背景化

55 (i) The problem arose.



57 (ii) The vase broke.



(iii) John broke the vase.



61 第三に、この理論的分析が抱えていた **課題／限界** をまとめます。限界の一つ目
 62 は、同一動詞内の混質性を捉えられないということである。上記の仮説2は、「ある
 63 他動詞が、動作主を不特定化、不定化、背景化して、能格自動詞へ自他交替を
 64 引き起こすことができるのなら、その動詞を使えば、不特定化、不定化、背景化
 65 したいときにはいつでも能格自動詞化することができる」という予測をする。こ
 66 の予測の下、次のデータを見られたい。

- 67 (5) a. John **broke** the vase.
 68 b. The vase **broke**.

69 (6) データ3

- 70 a. John **broke** the school regulation.
 71 b. *The school regulation **broke**.

72 (5) は、break という動詞が自他交替を起こす能格動詞であることを示している。
 73 であれば、仮説2は、動作主を不特定化、不定化、背景化させたい時はいつでも
 74 非能格用法のbreak を使ってよいという予測をする。だが、どんなに、不特定化、
 75 不定化、背景化させたいと思っても、話者は(6)bを用いることができない。よって、
 76 仮説2は、(5)bと(6)bの違いを説明できないという限界を抱えている。

77 限界の二つ目は、日本語タイプにしかない自動詞の存在が見過ごされてきた
 78 ことにある。先行研究で論じられてきた能格動詞は、動作主の同定において二種
 79 類の可能性があった。すなわち、花瓶が壊れるとき、誰かの外部の原因が存在す
 80 るケースと、自然に壊れてしまうときである。しかし、日本語には、このうちの
 81 前者の解釈が得られない自動詞が存在する。すなわち、「決まる」「植わる」など
 82 である。このカテゴリーに属する「植わる」を、意味がよく似た、能格動詞の「は
 83 える」と比較しながら説明する。これらの動詞が「勝手に」という修飾語とともに
 84 使えるかを考えたい。

- 86 (7) a. (i) ジョンが 山に 杉の木を はやし ている。 hayasi-te
 87 (ii) 山に 杉の木が はえ ている。 hae-te
 b. (i) ジョンが 山に 杉の木を 植え ている。 ue-te
 (ii) 山に 杉の木が 植わっ ている。 uwat-te

88 「はえる」「植わる」という動詞は、(7)に示されるように、どちらも対応する他動
 89 詞構文を持つ自動詞であるが、「勝手に」という動詞修飾語は、動詞が表す出来事
 90 が、動作主が不在の下で、生じたことを表す言葉である。したがって、もし仮説1
 91 が正しく、非対格自動詞がすべからく動作主性を欠くのであれば、この動詞修飾
 92 語は、「はえる」と「植わる」の違いに関係なく、どちらの文にも生起が可能であ
 93 るという予測になる。しかし、下記のデータ4に見るように、この予測は誤りで
 94 ある。「はえる」とは異なり、「植わる」は「勝手に」と共起することはできない。¹

95 (8) データ4

- 96 a. (i) ジョンが 山に 杉の木を 勝手に はやし ている。
 97 (ii) 山に 杉の木が 勝手に はえ ている。
 b. (i) ジョンが 山に 杉の木を 勝手に 植え ている。
 (ii)* 山に 杉の木が 勝手に 植わっ ている。

98 1 なお、(9)に見るように、動作主を明示的に表現できるわけではないことにも注意が必要である。な
 99 ぜ、意味的には動作主ができるのに言語化できないのかという点については、ここでは取り上げない。

100 (9) *山に 杉の木が ジョンの手で植わっている。

102 **3 分析：反使役化分析**

103 以上のように 2.2 に挙げた先行研究は、2.1 に挙げた先行研究に対して、説明でき
104 るデータの数が多いという明確な利点が存在していた。そこで、本稿でも、下記
105 の点についてを継承する。

106 (10) 先行研究から引き継ぐ視点：

- 107 a. 視点 1：自他交替を行う自動詞に二つのタイプが存在するということ
108 (比非対格動詞と能格動詞)。
109 b. 視点 2：能格動詞の動作主は、発音されていないが、意味的には存在
110 する。

111 しかし、データ 3 に挙げた問題点を克服するために、本稿では、新しい提案を
112 二つ行う。第一は、能格自動詞についてであり、先行研究が「背景化／不特定化
113 ／不定化」という操作を提案していたのに対し、本研究では、これが下記に定義
114 される「反使役化」という操作として分析されるべきだという主張を行う。

115 (11) 反使役化 anti-causativization：行為者 (x) を変化対象 (y) と同定するこ
116 とで、「あたかも変化対象 (y) が自ら変化する」という意味を表すこと

117 第二に、日本にしか存在しない、出来事を誘発する存在が変化を被る対象と
118 必ず不一致を起こすタイプの自動詞については、下記に定義される脱使役化とい
119 う操作の結果として分析されるべきだという主張を行う。

120 (12) 脱使役化：他力の存在を陰に隠して、対象の変化のみを表すこと

121

⋮